

報 告

IFIP 活動状況について*

後 藤 英 一**

IFIP (International Federation for Information Processing) は、世界各国の情報処理関係の学会、1国1学会以内を参加構成員とする国際的な学術団体(法律上はベルギー国籍法人)であって、1968年7月現在28箇国が参加している。IFIPの事業は、情報処理に関する国際会議とシンポジウムの開催、特定の目的を達成するための国際委員会の設置、各国の参加構成学会間の国際的協力の促進などとなっている。

IFIPは1960年に正式に設立されたが、その前年の1959年夏に、パリで開かれたUNESCO主催の情報処理に関する最初の国際会議の際に、実質的に発足した。日本は設立の当初からの参加国である。

IFIPの諸活動の中で最大の事業は、3年に1回開催される国際学会(IFIP Congress)である。1959年パリのUNESCO主催大会を第0回として、第1回大会は西独のミュンヘン、第2回は1965年米国のニューヨークで、そして第3回大会がこの1968年8月5日から10日まで英国スコットランドのエジンバラ市で開かれた。日本からはいずれの大会にも論文発表の参加があった。筆者も論文発表のため、エジンバラ大会に参加したが、それに先だって、8月2日と3日に、同じエジンバラで開かれたIFIP総会(IFIP General Assembly)にも、日本の情報処理学会の会長代理ということで出席した。この総会はIFIP参加国が、それぞれ1名の代表を出すIFIPの最高意見決定機関であって、毎年1回開かれる。筆者は総会への出席は初めてであって、これでIFIPの活動状況がやっと少しわかったというのが、正直な感想である。

大会(IFIP Congress)を初めとする各種の国際会議の開催と開催地の最終決定は、総会で議決される。現在、IFIPには、専門委員会(Technical Committee以下TCと略記する)が、TC-1用語、TC-2プログ

ラム言語、TC-3教育、TC-4医療への応用と四つ設置されている。これらのTCの設置、運営の最高方針と予算案なども総会で決定される。日本から委員で出ているのは、TC-2とTC-3の二つであるが、日本がTCの活動に積極的に参画しているのは、ALGOLのLanguage DesignとFormal Definitionが中心課題となっているTC-2だけといってもよい。

総会に出席しての最初の印象は、TCを初めシンポジウム、大会以外の各種の国際会議が、すべてソ連と東欧を含む汎ヨーロッパと、米国を中心として運営されていて、日本は、その恩恵にあずかることが、きわめて少ないということである。これは、日本が地理的に遠いために、旅費などの点から制約を受けることが最大の原因で、不可抗力もある。この点は、オーストラリアやメキシコ(アジアとアフリカを通じての参加国は日本のみ)にも共通の悩みである。

総会は、各国代表が自国や自分のグループに有利なように、会議の場所や予算をあんばいする外交取引きの場である。総会での外交のかけひきが上手な人は、例外なく、過去の総会の大部分に出席して、IFIP総会の勝手をわきまえた人であり、また、西ヨーロッパの小国の代表は概してかけひき上手である。メキシコ代表のBeltran教授は雄弁家であり、ヨーロッパと北米以外での最初のIFIP主催シンポジウムを、1970年にメキシコで、“ラテンアメリカの資源調査への計算機の応用”という題目で行なうことを提案して、総会を押し通した。また、アルゼンチンとブラジルが、IFIP分担金を3年分滞納したので、除名しようという動議に対しては、ラテンアメリカのために、ありとあらゆる理屈を並べて大いに弁じ、とうとう結論を出すのを、来年の総会まで延期させてしまった。IFIP会長の選任と大会の開催地決定とは、総会としては非常に重要な事項であるが、このような重要事項は、大会のある年の前年の総会で、決定する慣習になっている。会長はエジンバラ大会の終了の日、1968年8月10日にス

* On the Activities of IFIP, by Eiichi Goto (Department of Physics, University of Tokyo)

** 東京大学理学部

イスの A. P. Speiser (前 IBM Zürich 研究所長, 現在は Brown Boveri 社) からソ連の A. A. Dorodnicyn (ソ連科学アカデミー計算所長) に代わった。なお, IFIP の初代会長は, アメリカの I. L. Auerbach (Auerbach Corporation) で, Speiser が 2 代目, Dorodnicyn が 3 代目である。次回の大会 "IFIP Congress '71" はユーゴスラビアで開催されることに昨年の総会で決まっています, 今回の総会では, それが再確認された。

次にエジンバラ大会 (IFIP Congress '68) の様子をご簡単に紹介する。

大会には世界各国から 4,000 人が参加し, 34(1)編の招待論文と 700(15.5)編の応募論文や査読を通った 210(3.5)編が発表された。ただし, 上記の数字は日本の分であり, 端数の 0.5 は, ハワイ大学の渡辺 慧教授の, バタン認識に関する論文を, 日米で 0.5 ずつ数えたためのものである。

大会本部・講演会場・展示会場などが, エジンバラ市内の 10 箇所以上の場所に分散して散在し, その間を市バスが走って連絡するという会場の運営は, IFIP のようなマンモス学会を小都市で行なうには, 他に方法がなかったわけだが, 多くの参加者は, その不便をうったえていた。それ以外の点では, 充分満足できる大会の運営であったというのが, 大多数の参加者の意見であった。自動制御など他に国際学会が開かれているごく一部の分野を除いて, IFIP 大会は, Hardware, Software, Mathematics, Applications, Education と, およそ計算機の関連する分野のトピックスをすべて網

らしている。発表論文の主題にはならなかったが, プログラムの著作権に関する法律問題のシンポジウムが開かれ, また, 計算機が作曲した音楽のコンクールとその演奏会も一夕開かれるという次第である。

大会と並行して, 計算機メーカーによる展示会が開催された。地元の英国から 42 社, アメリカからは 27 社の出品があった。ヨーロッパからは 6 社で, 日本からは, ワイヤメモリの東光が 1 社参加した。

今回の大会に出席し, また, 帰途, 大学や研究所の情報科学と計算機施設を訪問してみても強く感じたことは, ヨーロッパでは, 日本の計算機のことはほとんど知られていないということである。いままでは, 日本とヨーロッパの間には, 情報科学に関する学术交流も, 計算機の輸出入も, 技術交流もほとんどなかった。しかし, このような状態が今後も続くのは, 決して望ましいことではない。IFIP の大会を日本で開催すれば, この点は飛躍的に改善されると信ぜられる。次回 1971 年の IFIP 大会は, すでにユーゴスラビアに決まっている。2 回先の 1974 年大会にはメキシコが, すでに誘致運動を強力に開始している。1974 年の開催地の正式決定は, 1970 年の IFIP 総会でなされるが, 日本が立候補するには, すでに遅すぎるおそれは多分にある。いずれにせよ, 電子計算機の普及台数が米, 西独につき第 3 位のわが国としては, 1974 年, または 1977 年の IFIP 大会の日本開催を, 真剣に検討し始めてもよい時期なのではなからうか。

IFIP Congress '68 の論文発表, その他*

中西俊男**

IFIP Congress '68 の technical program は

1. 招待論文の講演
2. 応募論文の講演
3. ディスカッション・パネル

から構成された。ここに, 大略の模様と二, 三の印象を述べてみる。

招待論文は全部で 35 編あり, そのうち 9 編は総合的な調査に関するもの (たとえば E. C. Joseph, Com-

puters: Trends toward the future など) であり, 残りの 24 編は現在関心の的となっている情報処理の話題 (たとえば, G. A. Rose, Computer graphics communication systems など) を取り扱ったものである。前者は, 1 時間 (ものによって 1 時間半) の講演であり, 後者は 30 分の講演であった。

招待講演は, George Square Theatre で行なわれたが, 特に, なか日水曜日の午後の Garden Party をはさんで, 前半のそれはきわめて盛会であった。通路は聴講者でうずまり, 演壇の前面は, 講演者に背をむけた熱心な会員に縁どられるという異様さであった。時

* IFIP Congress '68 Technical Program and Others, by Toshio Nakanishi (Railway technical Research Institute)

** 鉄道技術研究所システム研究所